様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １６ 日現在

機関番号：２３１０２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ２３１４２

研究課題名（和文）ペルーにおける水の公共サービス化・環境開発・水質汚染に関する文化人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Research on the Commoditization, Environmental NGOs and the Pollution of Water in Peru

研究代表者
古川　勇気（FURUKAWA, Yuki）

新潟県立大学・国際地域学部・講師

研究者番号：９０８４４１６８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：　南米アンデス山村では、①水利権の売買対象化・公共サービス化をめぐる生活変化や、②環境NGOの灌漑事業をめぐる反発、③鉱山開発に対する抵抗運動などが生じている。本研究では、これらの問題を当該社会のコスモロジーに照らして地続きに捉えることを目的とした。
　上記の研究目的に基づいて、2020年2～3月、2022年8～9月にペルー北部山村でフィールド調査を実施した。①世界観が宿る景観をGPS端末機器でマッピングし、②現地民話12編を採取し、③住民の20～30名に水の利用と生活との関係について聞き取り調査を行い、④鉱山の影響に対して住民は世界観からどのような感情を抱くのかを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究の学術的・社会的意義は以下の3点である。
　①現地の民話やコスモロジーを採取し、GPS端末機器によって民話の宿る景観をマッピングすることで地理的にコスモロジーの実態を示し、禁忌と捉えられている一部の場所を精査したことに意義がある。②環境開発や鉱山開発は、自然景観を改変するものである。他方、現地では一部の自然景観にコスモロジーを抱いている。そうした景観の改変／保全というせめぎ合いを、住民の感情やコスモロジーに着目して、地続きに分析したことに学術的意義がある。③現地の環境汚染の実態を質的調査を通じて明らかにすることで、今後の環境開発に対して参照点を提示したことに社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：　In Andean mountain villages in South America, there are (1) changes in ifestyles over the sale of water rights and the conversion of water rights into public services, (2) opposition to irrigation projects by environmental NGOs, and (3) resistance movements against mine development. The purpose of my research was to grasp these problems in the context of the cosmology of this mountain villages.
　Based on the above research objectives, field surveys were conducted in the mountain villages in northern Peru in February～March 2020 and August～September 2022. (1) We mapped the scenery where the worldview resides with GPS terminal devices, (2) collected 12 local folk tales, (3) interviewed 20～30 residents about the relationship between water use and their lives, and (4) analyzed what kind of feelings the residents have about the impact of the mine from their cosmology.

研究分野：文化人類学

キーワード：水をめぐる変化　鉱山開発　環境汚染　民話　コスモロジー　景観　農民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

南米アンデス農村では、地球温暖化による水不足や鉱山開発による水質汚染は契緊の課題である。これに伴い、近年同地では、①自由市場での水利権の売買対象化・公共サービス化をめぐる生活変化や、②環境 NGO の灌漑事業をめぐる反発、③鉱山開発に対する抵抗運動などが生じている。本研究では、近年の存在論的人類学の理論的な成果を援用して、これらの問題を当該社会のコスモロジーに照らして地続きに捉える視座を提起することで、他分野の研究者と協働しながら現実的解決策を模索する基盤となる当該社会の自然観や自然－人との関係をめぐる民族誌的資料を提示する。

ただ、新型コロナの影響で海外でのフィールド調査が十分にできなかったため、民族誌的資料の根拠となる、広範囲のアンケート調査を実施することができなかった。そのため、情報提供者を限定して、地道なインタビュー調査に切り替えた。インタビューの際に、ただ環境開発や鉱山開発に反発するか、どう思うかについて聞くだけではなく、現地の民話やコスモロジーを紐解くことで、住民たちが自然景観にどのような感情を抱いているかを理解したうえで、インタビュー調査を進めた。

２．研究の目的

本研究の目的は、アンデス北部山村での水をめぐる現代的な問題と自然景観の改変に対して、現地住民がコスモロジーに基づいて、どのような感情を抱きながら、現状と反発・折衝しているのかを明らかにすることである。

そのため、現地のコスモロジーを理解するために、民話 12 編を採取し、民話やコスモロジーが宿る景観を GPS 端末機器でマッピングした。そうした下地を形成したうえで、環境の変化や鉱山開発に関するインタビュー調査を実施した。

３．研究の方法

本研究の研究方法は以下の通りである。

①現地の自然景観に関する民話・コスモロジーを渉猟した。

②現地の民話が宿る自然景観を GPS 端末機器によって踏査し、マッピングすることで、地理的に精査した。

③現地のコスモロジーを理解したうえで、住民たちに水をめぐる生活の変化や環境問題についてインタビュー調査を実施した。インタビュー調査は、20～30 名の住民に行うことができた。

④現代的な問題である、鉱山開発に対する住民の感情を参与観察・聞き取り調査して、彼らがコスモロジーを根拠として、そうした開発とどのように付き合おうとしているのかを分析した。

４．研究成果

研究成果として次のようなものが挙げられる。住民のなかには、鉱山開発に反発するものと迎合するものとがおり、彼らのいざこざと、現地コスモロジーとを照らし合わせながら分析を行った（古川勇気（2021）「外的景観と内的景観の横断によるけん制－ペルー、カハマルカ県の鉱山開発をめぐる事例から－」『環太平洋文明研究』）。また、近年の環境汚染に対して公共機関や NGO などは何の対策も補助も講じることはない。そのため、住民たちは、鉱山の影響で汚染した川の水が使えず、雨水を利用して環境・生活の変化に対応している。そうした鉱山開発の影響を調査してみると、多くの住民が、景観が変わったことを嘆いていた。さらに、川にはマスが住みつかなくなって、昔の「豊かな生活」が失われたという者もいる。こうした状況について、現状の景観と住民の抱いている過去の景観とを対比、または結びつけることはできないかと考え、現在、分析している。

そうしたアンデス山村住民の昔の記憶にみられるように、彼らの自然の景観や恵みに対する「思い入れ」が大きいことが理解できる。そこで、アンデス山村における自然の恵みから得られた食品産物と、それを周辺の村人と分かち合うことで得られる「楽しさ」という感情についての分析も行った。現地のチーズ生産者は、乳製品を商品として販売する一方で、生鮮品である乳製品を周囲の村人と分かち合っている。そうすることで「楽しさ」を共有しており、そうした行為は昔からアンデスで行われていた農業での共同作業に通じるものがある。その感情の共有は、山村だからこそ得られる「嗜好性」があることを指摘した（古川勇気（2022）「「楽しみ」を分かち合う ―ペルー都市と山村のチーズに対する価値観の違いから―」大坪玲子・谷憲一（編）『嗜好品から見える社会』）。

アンデス山村だけでなく、多くの地域で生活の中心に川や湖など水質資源があるが、本研究の対象地域では、その豊かな水質資源が失われ、嘆いているという現状がみられたが、他方で、現状のなかでも生活を改善していこうとする、住民たちの知恵と工夫を見て取ることができた（古川勇気（2020）口頭発表「ペルー北部山村における環境開発とワカ信仰 地理的・空間的・伝承的なマッピングから」日本文化人類学会第 54 回研究大会、古川勇気（2021）口頭発表「民話による内的なまなざし ペルー、カハマルカ県の教育と観光の事例から」日本文化人類学会第 55 回

研究大会、古川勇気（2022）口頭発表「今も生きる精霊たち ペルー北部山村の精霊にまつわる語りから」日本文化人類学会第 56 回研究大会）。アンデス山村における水産資源を利用した生活や生業に関する分析の一環として、ボリビアのティティカカ湖周辺に住む住民の民族誌に関する書評を行った（古川勇気（2023）「書評：村川 淳著 『浮島に生きる アンデス先住民の移動と「近代」』」『文化人類学』）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 古川勇気	４．巻 5
２．論文標題 外的景観と内的景観の横断によるけん制－ペルー、カハマルカ県の鉱山開発をめぐる事例から－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 環太平洋文明研究	６．最初と最後の頁 1～17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yuki Furukawa	４．巻 41巻2号
２．論文標題 La producción de queso que no pone en deuda: Un caso de estudio sobre la distribución y reciprocidad en un pueblo de Cajamarca, Perú	５．発行年 2020年
３．雑誌名 イベロアメリカ研究	６．最初と最後の頁 57-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 古川勇気
２．発表標題 民話による内的なまなざし　ペルー、カハマルカ県の教育と観光の事例から
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 古川勇気
２．発表標題 民話と景観へのまなざし　ペルー北部山村での鉱山の事例から
３．学会等名 第14回「地域・実践・研究トークセッション～オンライン・連続企画～」
４．発表年 2022年

１．発表者名 古川勇気
２．発表標題 ペルー北部山村における環境開発とワカ信仰　地理的・空間的・伝承的なマッピングから
３．学会等名 第54回日本文化人類学会研究大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

１．著者名 大坪玲子・谷憲一（共編）	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 424
３．書名 嗜好品から見える社会	

〔産業財産権〕

〔その他〕

リサーチマップ https://researchmap.jp/7000029386

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関